ライナー・ホーネック物語 青年期〜 Ⅲ

憧れのウィーン・フィル入団へ

取材・文　岡本和子

2017年4月、紀尾井ホール室内管弦楽団首席指揮者に就任したライナー・ホーネック。インタビューや密着取材を通してその人となりに迫ります。

©ヒダキトモコ

1979年、18歳でウィーン音楽アカデミーを中退し、名教師アルフレート・スタールに個人的に師事するようになったホーネックは、ほぼ時を同じくしてウィーン・フィルの奨学金を得ることができた。同オーケストラと特別深い関係にあり、亡くなる直前まで彼らの指揮台に立ち続けたカール・ベームが資産の一部を投じて創った奨学金である。

「今はもうありませんが、ウィーン・フィルがオーディションで若い才能を選んで与えていた奨学金です。経済的に支援しながらエキストラとして一緒に演奏する機会を与えることで、若い奏者を育てるありがたい制度でした。私もすぐにエキストラとして国立歌劇場のオーケストラ・ピットに入ることができました。ウィーン・フィルの定期演奏会でも弾かせてもらうことができて、実践的な形でオーケストラ奏者としての経験を積むことができました。当時、私たち家族は経済的に非常に困窮していたので、奨学金をもらえて助かりました」

1

同僚となったスタールに師事しながら、ホーネックは1979年からエキストラとしてウィーン国立歌劇場管弦楽団で2年間勤務した。

「初めて弾いたオペラは『椿姫』です。自分は美しい音楽に感動しながら弾いていましたが、周りの同僚は『早く終わらないかな』と腕時計ばかり見ていました。幕が下りて拍手がおきてカーテンコールが始まると、みんなあっという間にいなくなって、気がついたら余韻に浸っている私一人だけがピットに取り残されていました」

ヴェルディの名曲に酔いしれた「新人」ホーネック。だが、指揮者の名前も歌手の名前も全く記憶にない。レパートリー公演だったのでリハーサルもなく、楽譜を追うだけで精一杯だったと苦笑する。

「いきなり本番ですからね。初日はどうやってオーケストラ・ピットに行けばいいのかも分からず、楽屋口から入って楽屋に荷物を置いて、いざピットに入ろうと近くの階段を下りて迷子になった。ウィーンは楽屋のある階からひとつ上階に上がらないといけないのです。『おーい、上だよ、上!』という先輩の声に救われました。今では笑い話ですが、あのときは冷や汗をかきました。とにかく緊張したのを覚えています」

2

1980年12月19日、第一ヴァイオリンのオーディションを受け、見事合格。試用期間を経て、1981年に晴れて正団員となった。オーディションの日、心筋梗塞で倒れて入院していた父親は合格の知らせを聞いて回復した。よほどうれしかったのだろう。3年後には兄マンフレートもヴィオラ奏者としてウィーン国立歌劇場管弦楽団への入団を果たし、父は兄弟がウィーン・フィルの舞台で活躍するのを見届けて亡くなった。

「当時のオーストリアでは、ウィーン・フィルの団員になることが音楽家として最高の出世コースとされていましたから、父は夢が叶って本当にうれしかったようです。幸せな終焉だったといえます」

3

4

1 趣味はサッカー。入団当初、友人から贈られたお気に入りの合成写真。題して「ホーネック＝ヴァイオリン＋サッカー」 2 今も大の仲良し。兄、マンフレートとともに
3 ウィーン国立歌劇場 4 今年ウィーンを訪問された英国のチャールズ皇太子がウィーン・フィルのリハーサルを見学。皇太子はチェロを弾かれるそうです。

紀尾井ホール室内管弦楽団
Kioi Hall Chamber Orchestra Tokyo
新日鉄住金文化財団

躍進のゲッツェルがシューマンのさまざまな二面性を鋭く描き出す2日間。

第109回定期演奏会
11/24(金) 19:00・11/25(土) 14:00

指揮：サッシャ・ゲッツェル　チェロ：アントニオ・メネセス
メンデルスゾーン：序曲「フィンガルの洞窟」Op.26
シューマン：チェロ協奏曲 イ短調 Op.129
シューマン：交響曲 第2番 ハ長調 Op.61